

特 116

478

一

新

新



始



特 116

478

一

新

新

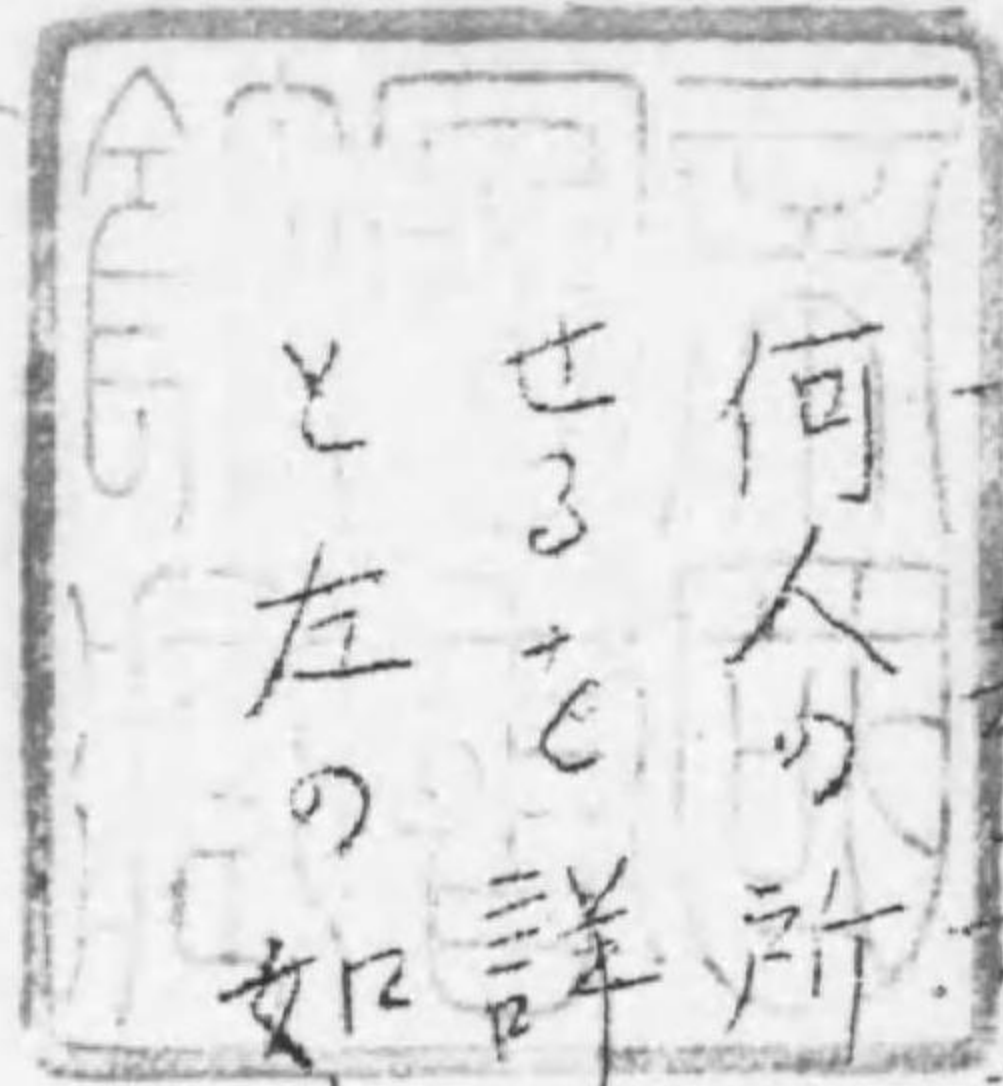
116
478

一
表
形

情
稽
散
人
團
水
作

特116
478

序
一夜船



書肆某草書の話を持来りて莫検せよいふ。これ
何人の所為とばえらぐれども。敏赤きを甚なり。略
せるを詳にして。教巻となして需に應ずる。
と左の如し。

滑稽散人團水

京より大坂へ十三里。迎も結ぶ夢を伏見の一夜
舟。寝ながら歩む事神通仙術にも優りて、字
樂の世や関東関西の衆合の中に。宵より
一

大正
5. 12. 26
内交

舌達者なる声は。四方山を修行の六十六部^ニの
初祭心。見聞にふる、事を咄しつゞけて。さう
とは睡りをさませしかば。耳にとゞまう、し端
々を。おもひ出るまゝに書付て、閑夜雨中の
伽とす。船中の記なれば題して名づくる事
えがり。

一夜船総目録

卷之三

第一 水上を知る浮ぶ瀬の酒

梅櫻大小の鼓

再び遷す平安の都

第二 花の一字の東山

面しろ狸これに迷惑

貞徳一首長嘯の返歌

第三 種取かゆる河原の撫子

人相に顯る、謀事

三

雪曾法印が事 四

第四箱根は冥途の関

閻魔王の御祓筆衆
頭の割るも知らぬ奴

第五諸侍の一言弓矢八幡

心の劔綿に三年
気の通りたる薦賢人

第六鬼と雷の評判區々

胎むと見へし若草の妻
床入から菩提におもむく事

第一棄掛馬の鈴鹿峠

作り髯は身替りの敵
義理には軽き四人の命
かはす磔女

魚突は晴し冥途の関
島原陣の手柄出し

第三月夜の高坊主

是は老なる臆病神
甥も流石は伯父の上ぬり

第四 人知れずこそ戀の梯 六

懺悔に消る蛇柳の露
敵も味方も諸共の涙
第五 人を釣れし夷三郎

一つみ取ある金山の蔓
枯たる板に早咲の梅

第一 離魂 病の娘

轆轤首の笑ひ貌
手柄咄は身より怨

第二 鍋蓋大明神

鎮西為朝の神靈
森長藤九郎が禿倉

第三 不断櫻は妙智力

袴肩衣の由来
案に相違の武士の嗜

第四 御慇懃なる幽霊

矢橋舟に執心の浪
大膽なる勝浦彦五郎

第五 手合せの仙薬

命を延ぶ筈用酒

八

熱過ぎたる金子百両

第六 呼子の傳授鳥

花と胡蝶の女心

産婦に道理を聞かざる耳有

卷之四

第一世は様々の國狂談

南部のわたくし大

面々家業を知らざる事

第二 祝言は内證にてざんざん

忍び階子は盗人の仕合
八百八品の浮世小路

第三 恩を忘れぬ狐の働

見ぬ戀をとりもつて二世の契

念佛寺の和尚これに迷惑

第四 隠れ里の美女来臨

夜毎にまかけられし夢現

梅田香之助桑心の事

一夜船総目録終

一夜船卷之一

一。

第一水上をとる浮瀬の酒

人皇第一神武天皇大和國。畝傍山に。始て内裏を造ら
せられしより。綏靖。安寧の皇代々遷都ありし後
桓武天皇延暦三年。都を今の平安城に遷され。
四神相應の靈地なりとて。安徳天皇まで三十余
代更に遷都の汝汝なかりける所に。平相國清盛
入道栄華の余りにや。都を津の國福原の郷に
遷し漸河殿何門の成就ありて後舊都新都
何れか優れりと諸郷の評議を聞かれし時。入

道の心を怖れし如何ともいふ人なかりしに。長方郷は
とり憚る所なく。福原の邊鄙は。平安城の勝地
にえがざる事を述べられければ。その日の評定長
方郷の善言に因り。舊都に還御あるべきに定
まらけり。後日に其座に在し人々。長方郷にあ
りて。さしも相國のいみじく思ひて造り廢れた
る京を。用捨なく嘲せられしに。不思議に承引
ありける。もし無興あらば。如何あらん浅猿かり
ぬべしと申されければ。長方郷されば隨介入道
の機嫌を計らひてこそ申つれ。大かた新儀を思

い立つ者はしめは我意に任せぬれども。その仕世
後に悔しき事ある時。必ず人によしあしを問ふ
もつたが。志がれば入道も新都は舊都に及ぶ事
事と悔み人にも伺ふ時なれば詞を残さず申しし
たりといはれける。まことに入道の心に叶ひけるに
や。そのうち長方卿。人に官位を起さるれんとせり水し
時。入道さし出で。よきやうに申され。殊外に物覺へた
る人たうたやすく人に起さるべからずと方入せり
水けるとなり。是を梅ヶ小路中納言殿の西京の定と
申とかや。中比丹後の國の仕官榎原金五衛川一子金

八。同家甲斐甚五衛嫡子甚九郎。金八と同年にて十
五歳なりしが。京より下りの鼓の指南する者の弟子
となりて生水つきの堪能番教もあまた覚えけるを。
師匠の身に嫉しく。兩人の器用なる事を一家中ふ
れありき。終に大守の耳に入り。金八甚九郎目見を
仕りすぐに廣岡にて高砂を拍ち申せとの御意あ
りかたく是は急なる難子。いひ合せもなりかたくまか
り出る時甚九郎親甚五衛は隨分教を出か
せとばかり申つけぬ。金八は衛門は金八に申合はぬ
は侍の遊は禁さのみはめられて益なし。さうたる

目見甚難なれば無調法仕るな。自然一四甚九郎亦授
したは。女方も饒とならざる様に拍まゝなふべし
心ならず一方のでかしだるは目見甚しき儀なりといひつ
けぬ。まかれ共兩人太鼓小鼓首尾よく相勤め。
大守様嫌よく拜領物を頂戴して退出仕りぬ。
其後金五衛門が金八への教訓つたへ唄て一家中感
ず入たる歌汝汝なり。ある時黒丸甚五兵衛切渡の
文殊、代参申つりられし帰りには、まかとは入海
より延虫のかつぎおけたる長八寸横四寸の蛇貝。此庄
屋が許りにありしを見事なる献上物として披両路せ

しに大守もとより酒に長しう申し折なれば。こと
さうの機嫌にて。猶細工人に時給彩色手をと盡く
させ。不皿の閑眼とて、腕近の者共相つめける。その中に
右の金五右衛門は上戸の隠れなく、側近くの口とよせら
れ。それがし常に大酒の異見家老共内々訶訟す
れ共。唐本朝の賢人既びて酒徳の頌をつくり酔聖
の詩あり。万葉集にもちほく酒の歌をつらねて、風月
・花鳥、紅葉白雪の媒とす。たゞし下戸の料竹間は格
別の儀なり。女方も一つなる口の樂女。同腹中なり
世将金八も。父が子たふべしとあれば。金五右衛門

謹しくて申けるは。物として親の身として子に武藝を
一六
傳ふ文を習はせ。早く上手になれかしと存ずるは親
の常にして人の評判まで^せたはしきは人情のなるはしに
候へ共。酒ばかりは子に飲たうべかし。上戸もなれかし
とほ存せず候。一盃たぐ申すと噂うり給ふは。いか
なる^た醉狂かあらくと云れづがい絶へざる事は必竟不
慙に存ずる故に候と。酒の失を詞の底に含み長
閑に答へ申れば。太守さまが得心ありけりや。
その日の閑眼の儀止の後。家中領内の所人百姓等ま
で。大に^取停止の觸家老申より申し物たさ水。金五右衛
門が手に落て。浮ふ瀬とてかくれなき酒興の奇物とは
なりぬ。

第二花の一字の東山

むかし若狭少将勝俊と聞えし人。遁世の後。長嘯子
とて洛東吉水の山陰に閑居せし。其手白堂の跡。今も
其形境は残りぬ。客は半日の閑を得。主は半日の閑
を失ふによりなるとも。人の問ひ来るを厭ひ。徳を隠
して生涯の思ひを和歌にのみを残されける。廿七松
永吉右衛門入道にて身徳と致たゆ。五條花咲の社
に住て。あるとしの端午に長嘯子の方へ粽五挺送ると

て折句にて。

うかき山。まろかきすまゐ。き、たか。ことひもせ
ず。はらは過ぬる。

長崎子の夜し。

うよふとも。まだたをあかす。さうたきは。こもり初
音のほの社守。

長崎子の詠草をあつめて集白集と題して跡は消
せぬたがき記念世に残るぬ。いつの比か長崎火のもと
に書こひろけておはしけるに。空より恐ろしく毛の
生たる手を運べる。顔を埋けるに。少くも敵馬ろく氣

色なる。朱筆のありけるま、彼の午のけへ花といふやと
書て又書と見ておはしぬ。夜の明かた空心の外に切
りに鳴き叫ぶ声する。はとめの手をさし出し。書付給
ふ花のやまと落しつたべ。われは哭邊りに住む志き
狸にて侍り誤まつて學者となふり。文やまと書付ら
れこれと落すべき術なく。帰るべき道と失ひぬ。
夜明な人見つけし物を殺すべき。悲しきやるかた
し御慈悲に落し給はれとたげきければ。不信心に
覺へて硯の水にてあらむ給へば。有難くして消滅ぬ
その後夜も母に木苗の花を四年に絶す時来し。

窓よりをどづれて帰りける。いつの比か台心たうてまゝ
ざうければ。いかに成行ぬらく不慙に思はれけるよ
う。狸の言葉葉といふ一小冊を作らねけるもかわ。

第三 雪曾日法印が事

まかし矢田の庄大野の何某殿日下世ありければ
矢田次郎とて嫡子あれば世継の願ひとして。譜代
上風せむし進。供を相勤め上洛仕るに。矢田北口の
庄の八幡宮は生土の神なれば。鳥居より下末し
て拜殿にましかゝる社人房太夫四郎出て首途の

神樂を捧げ。御祈禱の丹誠を抽んで。かうくしき
笛太鼓の音に。矢田次郎おびるるれしか。そのうち道
中に入らむく絶入せられし。これ敬馬風の病魔なりと
て。年段酉春の菊葉露齋が療治仕り。京着めで
たく大野の家督矢田次郎相續す違言有るまじき
段天小じけなく。十五歳より朝参仕れの先例相違
なく諸侍をたむび矢田の庄へ帰城すれば。家中はいふ
に及ばす町人百姓までかけうぬ地頭を視しけるが。
今頃は日下や八歳入学の窓には小學孝経の指南。
儒師書を巻く器用なりとに。以順誰いふとなく。

人よ氏よりそだち。誠の次郎殿は上京の節癩癩に
て絶入已来終にサ蘇生なかりしを。秋之進殿者露
齋と心を合せ。是家の滅亡。一家中の歎きなりと。
色々思案の上。竊かに道中野臥せし非人の子と
金銀にて買取。京都の首尾と繕ろひ。此家を
相續せし事。偏に家老たる人の氣轉。秋之進が
大器量といふ者もあり。又無用の出かしたと。
いろく評判つるに。座上の枝野丹左衛門は。先
大守の所縁ある身。その子へ一子丹藏は内縁他事
なきわけあれば。もとより心に陰謀評議なれ共諸

士の心底をのぞかす。渡りに舟と兼く秋之進が所為
さらく心得かたし第一上をくだすめ。行衛も知ぬ取替日
子と。何れもの主人と小宗敬さす事。奇怪横道至
極なり。以上は秋之進が謀計を上へ訴へ。いかた
る國取。又は堂上方の御庶子達を申請城主に定
めんといへば。尤もその理あるに似たれども。すでに世
繼の血脉絶たると歎かしく秋之進は上をくだすめと
罪科遁水ざる所は必定なれ共家督を相續すべ
き主人なきからば。銘々知行には及れ妻子諸共路
頭にたゞずむべきもはからひがたし。所詮取かへ子

の矢田次郎自然と滅し。かさねて筋目ある養老を
願ふべきに評定極り。さて丹右衛門が謀計にて
高野山よりと披露して奇效の占方。人相の見通
し。雪曾法印と云ものをまた一家中のいひ合ふこと
指すがごとく。それくにいひふくめて轉せ。不口面
出合いたるやうにて。萩之進が身の上と。行末は且し
く占方はせければ。うへには承引するやうにもてな
し。猶試々の為に。萩之進取次にて俄に目見致さ
せ。殿の御人相を申上よと申せば。雪曾暫時考
がへたる貌つきにて。遠慮に存ずれば得申まじき

よし辞退したりけるを。假令いかよの悪相おはします
ともはばかり申上られよ。御謹しみの為なればと
勧められ。扇と直し近頃恐れられ共。不思議や
は殿には乞食の人相備はる給ふと申すを暫時と
詞をおさへ廉念なる瘦法師。法量もなき上慮外者
と。一味の丹右衛門雪曾と追立てけるに。萩之進は
つと胸に迫るながら。少しも取あへず。いづれもの御
不審尤の儀なれ共。更に珍うしからざる愛身もの理
たう。たとへに引奉るは恐れられ共。天智天皇いまだ
位につき給はざりと御時。相人あらはれ君は乞食の

相おはしますと奏し甲け水は。三世の遠のほとけ。三
 界獨尊の御身たりといへども。宿業病を恨み給ふ刹
 利首施のへたてなく果は遁れがたし。朕帝位
 に登らざる前に。悪因を果すべしとして。西國御下向あり
 て筑前の國小佐島といふ所に。綱引の海士に魚を
 こひ給ひしとかや。さ水とも聖君にてましくける事古
 今顕也たう。以殿も忝なく明君の御果報にあやから
 せ給ふ御人相。御家の吉瑞と異國本朝の例を引て
 祝し申せば。密談の諸士存じの外の首尾になり。心の外
 の祝儀を挨拶として退出したるけり。秋之進つく

く思ふに。雪曾倭人と組して甲出でぬるよしなしき
 ちから。既に白皇の御吉例にあやからせ竊かに若殿を
 夜にまきれてお供し。領内の近江と乞食させ申べきと
 了。秋之進も形をやつし。心ひて執行ある夜國分
 寺の邊りにて。菰着たる男。物やるべしとこしちいさき太
 の山をさし出し。是は銀杏の三ヶ所の山なる。以木甲
 に夏に一陰来る夜に咲て。陰徳を歎はす雲木なり
 三角は三十年一世の談にて。一樹に三つ山あり。これ懐
 中すははとや合はぬ時。験をあらはすと云ふや
 し。必ず身をはたし給ふたといひ捨行新し知れ下た

二八
りゆ 萩に追奇異の思となしながう、此も音瑞と
懐中させ申し。それより四五軒過けるに、野中に夜の
撰待殊勝に、刺東山ける、囀礼世人はさう、床死になら
びたう。あゝしうしき、田方茶を汲で若殿にさし去しけ
る時、懐の銀木の枝る音高きに、驚馬き、頼て茶を捨り
流しに、何事し穩密の時なれば。廿款之進室有しつ
詮義と高下主の面を見上りめし。一断あまう立去る所
に件、囀礼共。信施厚恩の茶を捨たる曲者、道す
まじしと追かけ来る。若殿にあやまらぬれば、大事
に、無がうれんと。肩に掛て逃げ来る。床の桐橋

を渡り過し、跡を見かへれば、宵の非人何れよるか来り
けん、桐橋の板三枚はづし置は。追駆け来る志、水
者共。踏はづして川へ落ける。その際に、危急をも道
水萩う、追が屋敷へ若殿を入れり。非人も猶
これまで御供と申す。かいぐしきはたらき、いへに汝
か武邊たうとて、川内へ呼入れ品に、より、蓑衣美下さ
るべし。素宗生は御領分か。他國ものかと、尋す取け
れば、御不審を晴し申すべし。まこと、は先年子
を、進したる、野取の非人なり。さすが、因心、愛はなれ
かたく。廿節、ち、景の身に、そふごとく、二十月御

領内を徘徊いたす所に、家中ふたつに水取。妻も性
をいやしむ。若殿をたきものにせくとたく、を族多き
事。妻もく様子とうけ給はし。毒除の銀本にの
実をさし上げ橋板をはづし。これまでの安堵を見
とづけたり。今は包む所なし。我は筑前天國の
城主菊井左衛門が惣領太郎為久なり。継母
の為めに國遠せしにおいゑりたる女。波濤をた
のきともに流浪の世に杖にたつ子を儲けて後
母は桐葉し孤子。貴殿の所望に任せたり。我先
祖の位着に對せば。大野は命下にも耻ず。當

家に不足なき、美良子なりと天國の系圖を授し
一軸を桐葉ぬ。秋之進驚ろき、誠に入幡大菩薩
早世の若殿に取替させ玉ふたれ候。当家の敏宗昌
は神の擁護に任せ。急ぎ上詰して。立置ぬて天國へ
厚く蒙ふ。菊井太郎秋之進後見にて。領地
安穩に治まら。かの倭奸の者共は。まを懐ふ
に似て。家を忘るる。サ落度女からずとて追放せ
られける。

第四 箱根は冥途の関

箱根山の地獄は結城入道が昔がたり、都栗山の

六道は小野の篁も毎日冥途に通れ給ひし跡にて
今に七月魂迎ひなきて。諸人群集す。されば篁
は國無意王宮の執筆にて昏夜三時つ、睡眠の中
に。金鉄の札をばまゝされ侍りしかや。一とせ知覚法
師か途中の立山ほし見し執筆は。青砥左衛門
藤綱にてありけるが。其後出羽の羽黒にて見しは。細
川武藏守頼之にてありし程に。執筆の臣はかほる
事によと尋ね侍り候。青砥が巴前は楠正成なる
しが。正成正覚を得て後は。藤綱なりしが。これ
も成等正覚の後には。某なりと申さ候しなる。さては

篁もその昔の執筆と思ひ合されける。昔し中國
王倉の城主東武にて死去ありしに。加納又左衛門
井上文三郎殉死しける。伽坊主小阿弥道二は所防
に由つて雲州に残り居たりしが。大守の病重大切
なる事を聞たり。城下を出て昏夜を合分たす。
東武に下りけるに。箱根の湖水を過る時。道二
くと呼声しけるを。さつと見れば。大守馬上にて
又左衛門文三郎左右を守護し。汝急ぎ東武に
下り某日比秘藏せし二疋の馬。早く箱根に送り越
ぐし急げんと仰らるゝとは見へて消え失せ玉いぬ。

さては早死さまめさ水し面影に、對面申せしも嬉しき
三四
中の涙盡さず。急げは程なく屋敷に馳着き右の様
躰を被而踏すれば。兼て築馬に引申せの御遺言
三足の内三足はそのまゝなり。こ水も口替の馬なれば、
もあつべしと。口取四人相添え。屋敷を引出しける
に。やがて馬倒れてもたなく成りぬ。小阿弥も殉死
に思ひ定めしか。良峰の遁世を差次ましき例に思
ひ出る。一鉢赤衣にやつれ。雲州の山林に隠れ。他
念なく、昔提にかたふきけるが。いつの頃よりか夜毎
に草庵の扉を拍子どり、怪しき声して。道二が頭

は。てぎくくよと。座禪の床を驚かしぬる曲者あり。志
かれ共心を動かさず繩床三昧に入る最中。又かの曲者来
りて。道二が頭はてぎくよと嘯子たてたるに思はず法師も
拍子に來りて。汝が頭もてぎくよと嘯子かへせば。
負じと切りに嘯子あひしに。いつどの程にはたりところ
ひて嘯子止みぬ。不思議に思ひ松火を點し見れば
古々狸頭割て倒れ死ぬ。かのれが頭を尾にて叩き。
又は木にあつる人の音もなすものと語り傳へしに
違はず。かのれと叩きて。さすぶかうべのりてぬるも
まろくあるの自業自得の業因と不惑心に覺えければ。

草庵の側に骸も埋み。生涯朝夕回向しけるとかや。今
にてざく塚として隠れなれし。

第五 心の劔綿に三年

泊りの磯の城下には。浅尾勝右五郎。深根此右五郎はさる
入魂の傍輩とは見へたるが。此二三年いつとなく親
類同前のちなるが。殊に西人共にいまか三十にもたらぬ
身として極無天寺の庭に逆修の石塔と切て。同じ様に
立並へ置ぬ。さりとは急がぬるもあらう。何
れ若きも定めなき世はこれなり。又あなれ

し家中言沢山左衛門末子山三丞当國に並びなき美
形。浅尾氏が弟令にて数々于念心若の契り浅か
諸傍輩皆存じのうへ。勝左衛門を差まぬはなし。さ
共化ほうつわひ月は傾ふくならひ。山三丞前影友と取り。
そのまむの酒酌まんと。いつれも宵うちもてあされ。夜半
の鐘なりして一燈立ち。別して勝左衛門。浅右衛門祿嫌
よく勝牛取持て。帰定せしが。兩人ながら直に極樂寺
の門前にて見事に刺違へて。死貌當やく座をき立て
たる男ぶりの衣服腰の物立派なる様子。ひとつとして
譏りを得ず。まがしつながらは兩人は平生一人心をといひ

空月までまめやかに取持ち。別儀なく帰定せしに。いかな
る宿志にや。不審千万大守も喧嘩の次第を断入る
姓まで存したる者は申出よと尋ねありけりとも。仔細
まねがたく。いとへに酒興のやうにはしく取さた。山之
亟口惜く。武道の外の噂いひがひなき儀。二世の契約
今さらうせめ来るやうにて。もとより無足の方身。御暇念入
るまでもなく思ひ詰て。出家し。宿願かに國えを立見送り
けり。その後極樂寺門前に数年起辰すう乞人良右西
人喧嘩の次第をいよく語り。えまは右衛門
山三丞に執心してたかく艶書を遣せとも承引せざり

三八

した。淡尾と念比のよし倒つけ。直に世見いかかりしか
は。いかにも太刀先にて出遣すべきとの返事。もとより覺
悟の舞たれば極樂寺門前にてはたしあふ所に。は右衛
門申せしは其方侍の一分をたて、若衆故に討はたす
心底自分として申かけるかは覺悟なれとも。おれほど
美しき田方色也。心の花に樂しめる處に。我為に生害
し。残し置く姿の櫻。いかばかり残念たふへし。討はたす
事二三手相まか。山之丞田方となつて後なるに遣はぬ
一言申に及ばざる儀といへば。勝右衛門落涙してはたこ
御了竹筒感じ入たる情には。山之丞儀は直に進上申

三九

たき程に在すれ共世上へ某一分立成れば是非なし。其方
にもいまだ嫁せざる妹在しますよしつたへ兼はる御親
父なき上は御自分の世話にて一兩年の仲にかたづけられ
又山まゝも前髪を取れば。互に心にかゝる儀なく。潔
やく討はたすべし。以うは一命御用の外は互に頼
かり頼け申すと約束かたき石塔までたて置き。三手
以方その気色を山まゝも見せず睦まじく語りて。
さては首尾。おつばれ待たうと申しける。えからばその
節仔細存じたるものは申出よとお尋ねの時申たらば
靡れ美にもあつたふべきものを。おしだまりたは曲者

とて國中を追拵はれし時。我もそれ合点大なるは当
座に以次芽山こゝ巫さかたたらばいきえは居れまじ。
あつたら若衆の命を惜く今までは包みしなる。も体や
出家をとげ他國めされたと兼まはれば。兩人の酒
興にても討はたされたるなど。今もなきお持あるが氣
の毒さに。水は味して聞かせ申すと。いひ捨て他領
をさして行時。こりやく、汝れが着たる蓑や杖あり持
てけけといへば。以御領内にて貰ひし物なれば。四道土
立座に残すと云ひ捨て。再び跡をも見ずいかなるもの、た
水の果てや。

第六 鬼と雷の評判もナク

森羅三千の事物。五行有非情。皆鬼神のふたつより生ずる
 の形なる。世には思ひ違ふこと多き中に、別して雷の形と鬼の
 形と相似たる生物と思ふは愚心かたなるか。志がれとも雷の雷は
 リて。連鼓を打ておびききとなし。角をたぐき。鉄爪針毛あり
 襟にして虎の皮の褌異禪を帯す。これ佛經のうたかは
 しき。奇怪の論にはあらず。唐土より渡せし書籍の中に見
 えし。今の世に画がける恐ろしき次世ともあり。又は形を
 雞のごとく毛角三たせりとも。又は十二時の鳥けたもの、
 形とも。又は火の玉。又は水の玉とも。又は天上飛行の生類

ともいふ説あり。釋尊の説には譯中の雷火神ともいふ。え
 言う釋書にはは業野女自在天神の十六万八千の眷属の中
 の火雷神と見たり。いふさま物を碎き樹を砕くとも
 の跡なきははらまにやもあるべく思へどある説には比叺世の
 説なり。水火の二氣射して激音をたす事。たとくは水中に
 蟻を入るに御書言まことなすが如し。形あることなしともあ
 る。本も又いふくしき儀からたいて世にたなる事
 たり。空身盤金しても入らざる儀と思へども。時として
 遠慮なくお流すかゝるものたれば。心も驚きまじき物に
 もおそむ。さて鬼神といふも。世に雷の如く形ある

物と思ふこと。よくよく書籍を見れば。鬼は陰。神は陽の二氣の名にして。天地昏夜男女禽獸一切ありし物。鬼神二つの所為なり。志かたに往生要集に鬼は地獄の罪人を取扱ふしつに。牛頭馬頭の怨。形ありやうに見へたり。日本にしむかし大江山の鬼。鈴鹿山の鬼。鬼界を結ぶといへば。誠に変りたるかたよりある物のやうに思ふともよくその説を聞かせば。酒天皇子も立鳥鴨子もつわりの人間なり。鬼界か結は二夜刃四指刺鬼國と同じく天皇の侍士の國の名なり。これまた罪人の名を釘舟鬼にぞ埃き。死肉を臼につくやうの者に

四四

てはなし。伊勢物語の旨を一口にくのみたる鬼は。かの御説に與へて書る宿の鬼と堀川の大匠國経大納言の。情なく取リかへさうもといふにや。古今集の鬼も氷りともみしは源の重三の妹をさしていへるとかや。女は陰気の義なり。これらの説つぶさに別巻に工業すれはこくに田舎す。昔は美作の國淀山の城主の家来黒山土佐か二男荒五郎おのが勇力に誇りて。父子の礼をわすれ身を山野に遊んで麻糍を殺し。辻切を厭とせしに。ある夜女のひとり行を。月にすかして見れば乃て女と見へて懐かへられたり。打て腹の中の様子を見んとて。行邊に首打落し死骸

四五

是れは、水菜や煙菜の類を懐に押込ける病婦に
 又ぞあつけり。さてばよしなき事に殺せし事よと。始め
 こゝろ變なる心のきぬきに、うしろの物影見ゆると思へ
 ば南生の。髪乱れ眼光も、壹丈ばかりの鬼鉄杖を以て
 荒五郎をさへくんにぞ擲す。此の時肝魂も病るが如く、
 目比の雲が更に出ず。今うまの悪逆心併に悔み心にな
 りて。覺えず糸無路懺悔の一念起りけるに、かゝる鬼をみるう
 ちに少さくならず。荒五郎がふところの雁入てたちま
 ち消え失せ、世夢の覺えたるごとく。茫然とたすめり。
 然るに天麻家波向なりとも。防ぐべきと武勇力を屬し

一るに、心の鬼をば降伏しがたし。神は陽にて、陰は鬼
 たり。これ魂魄のふたつにて外よりもとめず。誠に一心顛
 倒すれば、獄を鉄杖を振るとあり。一心の鬼に一身をせ
 めらぬし。お猿しきよとて、それより離へし。さうは心
 の鬼を退治すべしとて、殺生の心おこる時は、例の鬼こ
 そて出きたれと。觀念して取ておさへ。念々毎に取ておさ
 めて。心の鬼を殺生せよ。殺生せがれば地獄に入る。矢の
 如し。思ひおたれり。南無阿弥陀佛と唱初ける。善に
 も強き矢竹心計かへて父母に孝行し。縁類に睦ま
 しく。他人に礼をおこなひ。仁愛明徳の本心に趣むき

ぬ。さればむかし江口の君に一度枕をかはせし人は姪徳
を恋水。かへつて菩提心にもとづきけるとかや。これ應心化
利益の方便なり。今この甚五郎が手にかりし女も。
大慈大悲の化身。假に見たる色相より。善縁に引入
れ給ふ御誓願とてありかたけれ。

四八

一夜船卷之三終

一夜船卷之三

第一乗リかけ馬の鈴麻峠

昔し今里判右衛門といふ浪人。出羽の國盛倉の城主に身上
相濟。幸心の明屋敷まで拜領の上。城州伏見に残し置し
女房と。一子十歳の判平を遊む言左右を告しかば。判
平は乗城馬。母は乗物の用意せしを。四方山見晴し
たき願心に任せ。母を馬にて目出度川出で。去かも日知
よく。浮世と余所にと詠める鈴麻山。河に驚きけん。
下り板てに馬けしとみ。母落馬して息絶えぬ。懐中の
あら申る合葉を勸むれども驥気更に見へず。十方に

四九

五〇
書る所へ。一人の旅の若侍立やすらひ、近頃カテ示た
から。廉の袋角を所持いたせしが。落馬の牧草と兼まは
申は進三申べきかと。仰まてに及ばず忝しけなく。削
りて用ひ申は。早速息出て。脉も常にたかはす
正氣一きぬ。判平大慌これに過ず。誠に御甘茶申す
壹人の命を御意に懸らし。段。御礼申上ぐべきやう
たし。見かり申所獨旅の御出立ナ。幸は東國御下
りたらば。此方には家来も御遊見の通り口と連しうへ
は。御洗足の用にも召しつかはれ。御心安く御同道申
べしといは。御心ざし。いかほどか忝しけなし。尤も此

共拙者儀は道中尋ね申す事これあり。一日二日進路を
致す用事あれば。とも御同道は致しがたし。これにて御
暇申すといふに。判平残り多く。尤もば御縁もあらはす
が同に思ふべし。返すく只今の御恩忘れかたく存ずれば。
自然羽州に御越し。しもあらはは度鯨倉の城下へ新冬に相
濟候。今里判左衛門と申す者の方へ御尋ね下さ水候に
拙者は同名判平と申すこの病人は。乃はち母にては度代
見より引越し申す所に。かやうの仕合にて御恩に回
り候段。親も兼まはらばいかほど大慶申すべきと町噂に
挨拶すれば。若侍もさては詳さに御名乗の上は。拙者假

とも申すべし。生國は肥前亀田の城下藤里百十郎と申すものなり。親百兵衛儀は病身にことわり相たる。暇をとり。十八九年已前京都へ引越し。養生仕るうま。去る御方へ出入仕りまかりある所に。鳥本奎之助と申す公家侍と為座口論のうへ。やみくと討れ奎之助は早蓮一京都を立退き。行衛知らずのよし。京にその使ひし中州國えへ告げ来たるぬ。女節は某幼稚にして。母か衣抱殺し空しく月日を送る。十五歳より二十歳まで親の敵をねらひに西國四國五畿内中國。丸を擲る。西は心づくもの果すども。さかしまりきぬれども。運

逢ざる不運の上。三年已前に母相果て。そのうへかたきの圃を見知りたる中州。舊冬又病死仕りぬ。人は何を目あてに敵をたづねべき。尽きはてたる武運と心ならず。両親を失なひたる。述懐と。杖柱とも頼みたる家来の病死と。取集めたる無念。自害をも仕るべき。共なしたれども。兼くかたきのたづかつかう身癖。物いまで詳さに下人に兼まはり置しを便りに。又さまよい出で。此度は関より。東は日の出の暎をかぎり。業は七ヶ國の波濤をきはめ。雲を分け土まうがちてたるとも一度は探し出し奎之助が首を亡父にむ向度所存の外なしと。泪を西復して始

終の物語は。判平が以前の身の上。肝にきたへぬ水ども。うはべ
 は何となくもてなし。御念力いかで武運に叶はざるべき。追付
 御本望を遂らふべし。かやうの一大事を承はるうへは。数な
 らずとも興力とまかりなるべし。一度は関東へも御越あらば
 一働き仕らんと。咄志ながら中関村にて別くに宿を取らけ
 るが。判平つくつく思ひ遠すに。まさしく親を討んと取ら
 ぬ敵を。聞逃しに成がたし。名乗かけて帰り討にすべきか。
 さね夫人の母の命を助けられたる厚み因心あるは。眼前の
 恩を知らざるに似たり。又討ざる時は父の命危し。一生の
 安否とらうつなづき。先系賢を刺殺し。油袋にて備

中関村を作り。眼に奥の鱗を入れて鏡に迎へば。親判右衛
 門が数にらみ。うつせはうつす形次女。もとより親子の似る
 までもなく。葛籠の荷口を解て。親判右衛門が青茶
 の小袖。常紋のふたつ巴今宵は廿日亥中。月まだ遅く
 百十郎が旅宿に志かけ藤軍百十郎といふ者以處に泊
 るを見届けたる。鳥本查之助といふ者對談すべきよし泉
 声に承りていふも。百十郎早く聞つけ。さては今日道中に
 て不覚懐なる物語せしも。石に可なりて敵聞つけ。返
 り討にすべきと足まできたりけん。討も討るも武士の習
 ひと飛出で。一太刀討合せしに。判平が同釘はしりて。刀

は傍へ捲て飛しかば。百十郎も刀を捲て引但み。取てお
さへ。断の若共提灯を出せといふ声に。やれ喧嘩よ狼藉
ものよと。家々より續松を出しけるも。百十郎声かけて
断人共騒ぐべからず。かねて役人衆へとはり置直し親の敵
打ぞと去づめて。さても幸末の本望をま違するにくらか
りにては残念なり。ちかと頬を見つ見せられつして潔よ
く討とも討るゝとも名乗逢べしと。火敷に引向てみれ
ば。崩及むしかたきは五十あまうと崩れ。いかに夜中な
ればとて一向なま若輩軍に見る是一つ。もし又まことの
判右衛門にして。かへりうちにもかける程の所存あらは目

釘竹の味なる事是二つ。そううへ十五歳より六十年は
大わういありきてさへ。知ざる敵か。今宵一夜の旅宿を知
て逢たがり逆よせにたう取きたる事。室倉の三つなり。父
の雛に自僕に天を翫かざる大事の敵に命あしきものを討
ては益なし。角鬼曲物には極りしうへは。縄を懸て吟
味すべしと。ひしめけは侍に縄をかける法ありや親の敵
の縛り首を討由々怯者といふ貌つきも。見ば見よ程分
見たる判平な水鳥。多込にせしを許して引たてこれに
は様あるべし。仔細分既に聞といけぬさきには弓矢
八幡合子には殺せぬと。さても立派なる敵うち。討れ

多もうたれと。断人門を固め。なうと云うめ。事と傾ふ
けたる。此へは陳じてもや益なしなる程人の目お目に
駭りたると判平な。其方の心をつくしねらふ敵自の本を
三助人は假名にえ名まであらためて。すなはて拙者が親
なり。志分を返す計にもして。親に安堵させたく思ふ
志しは其方が教を奉つねねらふ孝行に同じとわかれ其
今より毎々人を助らねたと思ふも黙止かたく。鬼角を
我がトホニ之助にたうてうた子ねは親の名代。女方には
甲斐の知をさす力を盡せしむれば。互にたれへの一人は立
て助る事な。さうに上りて。その心は。親の事と
親共の

羞恥を以て。匪徒を傲て。返り計を在りて。其方に本意を
せむと。思ふ所は。其方の本意を以て。其方に本意を
心慮を無して。上りて。其方の本意を以て。其方に本意を
る。其方の本意を以て。其方の本意を以て。其方に本意を
断人共は。其方の本意を以て。其方の本意を以て。其方に本意を
に。其方の本意を以て。其方の本意を以て。其方に本意を
却りて。其方の本意を以て。其方の本意を以て。其方に本意を
さあ。其方の本意を以て。其方の本意を以て。其方に本意を
百十郎を引立す所へ。判平母がけきたる。汝が為には親
の敵。我為に夫の敵なれども。今日一合を救はれしに。

義理の敵と牧子の判平に切つけしを百十郎。是程の
孝心ある者をば討せまじきと判平に回復の旨なるを母
あやまつて又百十郎を討ばは度の子にはや息絶へぬ
判平も涙も子ながら所悪く一太刀にて事切れしを。母
見届けは世はそこそ敵味方とはなれ。未来は一蓮託
生。兄弟とも生れよと二人が死骸をうちなめ。さしく
存なる者共かなり義を守り侍かなと小袖を垢て二人の
死骸に打回復い。判平が腹さしをこゝろもことにつきたて。
さしつうぬかれ死にけり。は次第判右衛門傳へ聞主人
に出家仕る暇とは願ひけれ共。三人が最後場に来り立

腹切を相果てけり。義理不軽き武士の命削の四本平都
婆とはこれなり。

第二 詞をかはせし碓女

武州河越の任人入麻和右衛門仕官を辞して。暫日
らく閑居せし頃給父へ立掛る。夜更入りて其角の山原
陰に佇づき。道に逢れたる臺人の僧を待合する所に
その辺にかゝり逆磔の女。木の空より這い下り子にて寄
す。和右衛門が前に来りて。御自分ならで世に頼む
方なし。以川を負担し。向う家の門に張りたる祈
禱札を割り給れといふ。和右衛門女しと敬馬と云

色もなく。今向ふより川を越して来りし者なる。あといへ
 度らん事いとむつかし。今に向ふへ行者来るべし。そ
 れを頼めといへば。女洞を流し余の人はいせを怖れ
 て近ずかねば。詞を替すべき便りなし。たまく人界
 に生れきたる。又修羅道に永く沈む若患を助け
 給はれと。かき詢きけるに。哀れと覺えといざとて後
 を向けねば。女娘しげに身を取ら直して三府にかゝり
 ぬ。嘆く穢きはしき。乱れぬ友和由右衛門が顔に西復
 ひ。心ならずも川を舟越て。かの家の前を下し。川の
 札を割れぬ。は女うちを失ひ。家に入ると母へしが。念

家内騒動して。やがて女の生首をくはる。始の川を
 越すと見へぬ。和由右衛門興醒ながら。又川渡りける
 所へ。最前の磔あらはれ出て。御底にて本望を遂ふ
 けなき事。詞に述べたし物も。かの家に仕はれと者
 たりしが。主と心を通はすと疑かひ。女家主の計みにて
 無ら大の罪に身を墮し。かゝる苦しみの死を致し。二世の
 罪を植る。瞋恚の恨み今宵本望を遂たす事御恩淺
 からすは一念の力をもつて。御返礼申すべし。望み餘へとい
 へば我を護の札を請べき所存なし。然れども女に頼ま
 れて人の命を取た本は。罪障如何ばかりにあらん。是

を初世歿心として。世を捨て彼者の菩提を以て中へはくと
 思ふの外なし。我に厚恩の古主あり。もし汝が志し
 空しからずば。その市方の武運を守れと申すれば
 畏こまらざる。諾して消へ失せぬ。和久右衛門はそれより
 剃髮及法衣の身となり。一と歳津の國長柄の片屋
 に暫し行脚の笠を脱し祖實法師なりしと加や。か
 の肥前島原一揆の時。逆跡の影。ある備の笠籠にう
 つりたる武士。差をとらしたる事かくれなし。その子
 孫相伝きて。今には沙弥の幟には旗を飾りけよと囀り
 へぬ。是をればかの女の如くならば。世に幽霊といふもの

極まつてあるものなや。若て回く物心して万物の上に常と変
 の二つあり。悉しく愚心作の獨鉗鎌論といふ書に述べた
 れば。爰に略す。今は不審につき。いはゞ平生底の人
 気衰へ形づかれ。生老病死と次第して死する人は。火
 の自然う消えて。その灰にも暖かなる気のなきかごとし
 是常といふものなり。爰死は人を恨み死にし。或は劇
 諱。劔戟。中矢。禍害によつて死するものは。その気も
 形もいまだ自然と衰へずして。お十兩に死するもの。
 未だも火に水を愛て消たす時。暖かなる気暫し残
 るかごとし。猶その火その気の強弱によつて。その残る

品にも浅深厚薄あるが如し。天地の間も生ずるもの皆
 氣より起るなり。此の氣の滞る時。形を生ず假令は煙の形
 あれども手にも取れず火にも色相の物にさへはる事
 なしといへども。積りて煤になりたる時は。手に取る
 るが如し。是の氣は質のほじめなり。その氣滞るは
 形をなし。声を生じ。黑白青赤の色相を顯は
 す物を名けて幽霊といふ。是の變といふ名義なり。
 善もたす者は善の氣凝て善處に形を顯はし
 惡もたす者は惡の氣凝て惡處に墜るといふ佛
 説も又宜ならざるや。

茅三月夜の高坊主

昔し都四條坊門に味噌屋仁兵衛といふ者。二條辺に師
 を取つて。女夜謡の稽古に通ひける。ある夜常もは
 更行空に連立友もなく帰り。門をぬかばたゞしく叩き
 けられた。内も驚き明ぬるに。仁兵衛人心なく。氣つけ
 を吞ませてやうく生還りて。特歸るさ月夜ながら博
 曇り物凄きに。堀川の辻にさ脊たかき坊主は後よりお
 ほいかいりし申る。息をきつて逃げむは急に追かけ
 来りしかは門口にて見失なむ。それ申るにかゝる仕合と
 いふは。聞人皆驚きそれこそ見越入道よと古

を振はしけり。此一物昔しより高坊主とて。野原墓
原田辻橋の辺りより必らず出るといひならはせり。是悪
かなる人に臆病風吹そひてすごく歩行夜道月影に
気の前より生する所の影法師なり。その仔細ははもの前
より来らず。臆ども見えぬ。後より見こすは。火
のひかり月夜にがぎりて闇にはあらはれぬ。暗き所に
脊高き山伏や坊主などの見ゆるは狐狸の類いなごべし
さて又月影前よりつりて見ゆるに。男とも高女房と
もいはざるは。後よりさす影法師なれば坊主のごとく
影のうつる故なり。仁兵衛おびえたる取次法師頭隠れ

なく。實にも味噌屋の志るしなりと秀句を申あへり
ある夜に仁兵衛甥深草より来りしに。あはたばしく
扉を叩く。仁兵衛何事ぞとくばりを開ぬるに。甥の
仁助片息になつて申やう。寺所の辻より見越入道直
かりし故。これまでは逃げ来れり。助け給はれと涙を
流す。仁兵衛折交む。我もは頃臆病からさやうのうろ
たへたる事をいひて近所の衆に懇んれ。又甥をば外聞
悪し。それは何れ形のない月の影法師なり。まづ内へ這入
といへばやく後から帯をとらへて只今引ずつてまいると
いふに。内より子を取て引入れ共女とも這入らずながねると

わめく。身をはたせば外から引ずるといふ。仁兵衛も呆れて
お水が絶え入たを何れも今合点が申くべし。月の影には
様に手足がついて強力なるものか。何とぞ外へ出て。その入道
めを仕様はないか。梶戸がせばいにちうて内かうは最早出
られず。お水を竹矢ふた衆へ見せしめの為め両隣を裏か
うたのめとわめく。声高なるに驚き両隣の八右衛門東隣
の七兵衛何事ぞと出合。梶かうととづれければ。その世帯を
取へて居る入道めが何れもの眼には懸らぬかとわめく。い
かな事嵐一足あうばこそ。かれく仁兵衛が味噌焼大金
に合いたる。大坂抄子のあつうへを。仁助齋中にさしてきた

七。

りしか。東山より出し月影に又高坊主と見えしを。首
の細き事糸の如しと甥が念を入れて云ほどをかしく。帯
にさしたる抄子の梶につかへて這入めを後かう引と見えし
甥も流石に仁兵衛が甥なうとて又こ水汰汰。

第四 人走れずこそ戀心の梯

昔し河内の國の城主に仕へし高共長木左右衛門といふ男下城
の折かう岡打にあひぬ。弟白右衛門は無足にて近習並勤
めしが。兄討れし時は。一兩日他國殺し。帰定後無念に思
へども。敵走れず森右衛門事は日頃奉公苦心がなく。貞
実なる者なりしか。以度だまし討にせうれし事。大い寺に

七一

も残念に思はれ。ことに當家久しき給人竹助同なれば名跡
は弟白右衛門に相遠なく申つけられ。何時にも兄が
敵存じよりもあらば。暇給はまへしと忝なき仰せながら。
無念日にまゐり。何事やら出じ聞出さんと様々心と
尽しぬ。去かるに本林右衛門後家は同家中赤崎卯京
が娘にて二三才まへに縁辺一取結び。一死後に男子誕生せ
しが年若にしてかゝる仕合親も不敵心に存じける。折節
相役駒村友右衛門妻に望み余儀なく取持を頼まれ
たる衆中内談ありければ。侍の娘再び嫁する法なしと
後家を始り取合ざると。幸ひ可たる傍輩申けるは。そ

水は勿論の儀なれども既に河津が後家曾我の太郎に再
たび嫁して。祐成時宗に親の讒言を討せた。これ吉例と
志いて觀めけり。いづれも心に思ひもつて。本林右衛門が
孤子森之丞を運て。つゝに管札相濟しう後夫友
右衛門が嫉嫌を取てすへぐ成人の上は。何事敵の行衛
をも聞出さ。其時ほよき後見と朝夕ありなくおたる内に
友右衛門が娘を懐胎して無事に平之丞の七地こび重な
る月日早く。以娘十三本林之丞十五歳になつぬ。かく星
兩相を経水とも本林右衛門が敵は知らぬ極まつて後
は。家中にいひ出すものなく。人言の白右衛門もおの

づから世上のぬかり親に過行、そ本意な付れ。ことしは
前太守の三十三歳忌、代参として高野山への使者、役友
右衛門兼はる。登山首尾よく相勤め帰りける夜、
女房子供を近づけて。童代の刀を竹林に置く。近
頃非道なる次第なれども。殿々物語して聞えし。必
らずはやまらずとも得心せよ。其方又父を林右衛門
と我は無二の中よき友なり。衣服腰物まで。物教書
互に同腹中にして、家中の一対男と。名の立ほと睦ま
じく語りけり。ある夜例の如く、竹林右衛門門方には、心安
く内證へ通りて誑し居あるついで。物としに女の声に

て拾遺集の戀の部の中。壬生中に見かよめる。戀心すてふ
わが名はあだきたうにけり人忘れずこそおもひをめしが。
のほかもしの清濁の御沙汰まぢくなりしに三光院殿
の御説にははかばかにあらず。初しものことといふ我な
りと。三院殿にみわづかいせし時聞ふれしも今ははや
むかしになりぬるよといふ声もれ聞えぬるに艶しき歌
がたろ。いかなる女と思ひ念すれば。古林右衛門が妻は
京より呼迎へ。三條殿の家に住へしたるを當て聞及ば
しに逢はがりけり。まことには歌。人知らず心の甲に
思ひ懐し物を。はや戀心するといふ名の立たるよき歌

たもさま。感情かぎりなく。面白き歌の評判に別して志
 めやかに。こころうにも雑談志みくと酒事ありてら角に帰
 りぬ。斯ふし秋の夜のなかきには月はまだ南おもての窓
 に残り。サ秋蔭の誰掘くらん。風の音つれ身にしみしみの
 歌はなしの艶なると思ひ出でかゝる女もこそ物宿の妻と
 眺めなほ。心世のかいと並次やましく。いたすら見ぬ恋
 草の種となる。猶獨寝の床淋しく夜にまし目にそい
 いやましと思ひの色。空にも人知れずこゝ焦れそめしよ
 無心念起り木林在衛門を討て後。かの女を物方に引入んと
 いたすうに思ひ立。と上頭入魂を忘れ。木林在衛門が城

もう帰る夜の時節を定む。大牛足の上木に身を隠し
 行過る所を横合より切つけしかば。家来は逃散ぬ。早
 く抜合せて鎧を削るといへども。初太刀深手なれば。無
 念とはかりに倒れぬるを。早早く止めを指してその場は
 立退しかば今うに知るものなし。その後世間兎角取巻
 か。物方へ迎ひ取る。今夫婦の中に娘まで儲けぬ。然るに
 以幸月白衣衛門が情多。又は日頃木林を亟に云合め
 と上は故の知さる事。如何はなり無念に思ふらくと。
 朝夕心かゝり。さうとは非道の意心路申へ。無二の位方
 非事を殺し。彼等が歎きを余所に見て久しき可を經

るに従いなくて、人とはと以前の悪心悔しき事。折ふ
しごとと思ひ続けし所には度代参として高野山
に登る。宿坊の用事残らず相勤めて後ち大師の御廟
へ参るも。渡りにかゝりし御廟の橋の元に大蛇舌を
彈けて待ちかけた。我勇氣なぢの針弛みて。おぼみ
わなききたふれて。前後を知らずふしぬ。僧達かけあ
つまつ。咒を唱ひ。水溜が漸く正気になつぬれば。人老
らぬ大衆ある人はいつれし斯の如し。懺悔せられよと
勧めにあひ。恥かしく口惜く有かたき一念参起に
任せ。ありのまゝに物語りてせしかば大蛇は柳と変じ。

崩に月輪の空はれたる心地にて。御廟を拝み。善心がな
く下向せしが。因果は早や未来を待たず。我武川の
断絶遠かるまじ。承らへて恥を見んも。今は名乗
て本林之丞に討る、なう養父の用携なく我首をば
取て。山又本林右衛門に手向べし。娘も必ず見本林之
丞を怨むべからず。此刀に父を討たれば女方にく水
しなる。早く首をとれ。白右衛門方へも人を遣はし
たうといふ所へ。日頃の御よしとて上平久しく知かり見
か敵御知せの御恩忘れがたし。かの者はいつくに四死を
ぞ、以上ながら御指圖に覆る本望遂たしといは。

友右衛門即ち拙者なり。早く討し合見にも向られよ。
 願くは本林之丞が手に懸り行末親の敵を討たし男と
 云せたく最前より申合もれ共。流石襦袢の中より親
 子となりし馴染にや若涙いたち軀。さうながら不敵
 に存ずると。いふ詞の下より本林之丞と声かける左の腹
 に刺たて衣へ引まはすを白右衛門驚き。是は様子志
 かと崩分がたしとはいへともたまらぬ軀まづは父の
 敵と崩分がたし。猶縁はたうがたし。然共本林之丞汝が親
 の敵なればと。介錯を勧め。次に白右衛門も太刀疵を

つけて。本望を遂りたるけり。入組たる儀なれば本女細に
 上書をもつて。太守へ披面踏したりければ。一旦のあやまちを
 あらためし所存の子供が討か取たる軀。かれこれ不敵心を
 加へられ本林之丞には友右衛門が所領女の終跡目に
 申つけられ妹が縁組の沙汰まで指面ありけるとかや。

第五 人を釣夷三郎

筑前三牧の庄。相木屋理右衛門。代々富貴なる商人な
 り。生得律義に假にも偽はるを云ねば。人の詞をも疑
 はず。正直や理右衛門と世の人に呼ばれる。は家の庭に
 古木の梅あり。花の比は月まで薫る。あしたには鶯鳥の囀

つりをも初陽の母朝の歌を信じて。浮世の遊ぶたはふれ
を知らず。以一本を血赤しみに。室のる青梅も喰はざりけ
り。ある時川にたき赤心比須の本像ましくけるを捨
い上げ。押戴きこれ禍の神と深く信心し。造酒洗米
を供じける所へ。日向の國猿渡郡河内屋善兵衛と
云ふ者来りるに無事の挨拶事をはる。さては度金
山にかゝり。金の夢にあたり鉄ではるおこす金儲け。
今の世は何をたればとも似たる事なし。は銀衆をか
たらむに。兵人上方へ登り次平よく立寄りしといふに。
理在衛門さては吉瑞をさきたつて示し給ふ禍神の入

せ給ふと心つきて。何とその中間に我も入給はれ金元致
べしといへば是ほどの吉事を故なき他人に組人も残念心
と存するなれば。貴殿は教書の懇意なるほど我等
請入たると山の吉左在滞平で金銀の扱みとくを
りければ。理在衛門満足して大分の小判を打込ける
友かれ共元来謀計事なれば。理在衛門退屈の身を
見ては。今三間堀は真臆にあたるの壺又先はきほひ
につくのと。ひたと花とばせけるに有たけの金銀を横
取にして欠落したる。後には剛ばかの赤心比壽の像を竊
に理在衛門が門に捨置き是に氣を動かさせて都合

よく討ちけり山こかしとはこれなり。

一夜船巻之三終

一夜船巻之三

第一手柄詠は身の怨心

昔し葦島殿の御娘容儀勝れ心も優しく、月雪花紅
葉を数へて本年中十三の春。三位中将殿へ御輿入あそばさた
相極まり。家申こぞつて賑ふ所に。此娘所居大方なふす。
段々療養を尽すといへども。更に験なし。密々の儀なりと申
せしも離魂病とせにけりなふ奇病。俗にかけの病とい
ふ物なり。本復なきはついでに。中将殿へ婚礼の儀無首
尾といふ家の面目をなく難儀な水成。お部屋台のゆくはく
神南備寺石衛門思慮を遠らし。女房彦山の山伏勝鬼

坊として名高き駿若と堀き一七日加持の行法を勵み申がせん
 けつろおんの中。林丸焼を修し丹精を扱してしがば。奇病
 瞬時に車復したけり。文字は申まに及ばす幸在衛門大慶
 斜なる手礼可厚く欣戴せしめ。故に平山に仰るよむ。殿を
 に幸在衛門定に來れる頃。此度の儀々力を感じたは扱
 扱のうへ。愈々以病快なしの儀頼入久。さて詠しには崩へ
 たれとも固に見じは始めなり。かやうの類世にあふ事やはと
 是やねいれん。勝鬼坊されは限りなき天地造化の變に至
 りは見識に計りかたし。此度御病悩去いて不患遂に
 あらす。皆くおつしといふ書を見れば南方に尸頭船とて

夜毎に人の首骸より扱出て耳を覆ふとく飛事鳥の如しと見
 へたり。又搜神記にも女の首の飛事とを載たり。此頃假耕
 録を見しに陳公子といふ者。南梁末きころの詩に首の飛事
 と。輾轉の如し鼻の吸とも鯛に似たりとあるはかの園には
 珍しからずと見へたり。其外段西書に去り病の却あり。稀
 なり事申免不潔をなす。たかれば其多くは書に務に傳は
 て正しくかやうの品を眼前に見るはあなし。されば其
 と。歳肥後の園裸島へ回帰しぬるに。鍛村奥原休藏が許
 に一宿侍りしに丑満の段休藏が妻の首扱出て白き糸を
 引て窓より行衛をらす。返方に以首帰し其え爾と笑ふ

か知く向ひか骸に收まらぬ。主人歳次語りぬる中なりけり
八八
は。に綱かに知らせ拙僧加持の力を以て重なる討し見さ
に。怪しき事更になし。如の程の難病たるといへども教坊
の力にて本復致さぬ事なると。嚴しう詭を幸右衛門
つくづく聞て感入たる風情にて思ふやう。此度の奇病
もあつかり柄訪に。事に附ては快癒せしき物にあらず。
なればあ家の名を出すべきは父定なり。所詮は山伏
をたきものになさばやと思ひつきて。立山に帰る道に家
来を廻し過ぎ。遠く天に射殺させぬ。かゝる忌むべき験者
なれども幸右衛門が忠は我の一念にありて。かく討はれぬ

武士の憤りにほかつ佐々木成四郎が膝戸の茶室にせし浦の
男を害せし類なり。幸右衛門も此綱かに塚を築かせ
念佛供養の志を余所なからせしか。誠に魂は天に帰
り魄は地に止まらばや。時として塚の底に。法螺貝のお
と聞えしを往來の旅人怪しく思へるとや。

第二 鍋釜四大明神

伊豫の國に幸摩郡川野江の辺りに西行松とて十はき根
あかりの逆枝うつたりし木つき。如何様かの法師の杖
へたるをたきにくしく覚えけるに。如何なるものか西行は
西國に渡らざりけりと申しぬるは不審しく思ふ折から

深えの軍記に讚岐院と申奉るは鳥羽院第一皇子七十
九。
五代の帝御在位十ハナリ永治元年十二月七日讚岐へ遷
幸ありたる程に。西行法師諸國修行の時。此院の御
廟の前に蹲くまうで悲しいかな十善の立仰王。万様の政
事を修し四悔を世平に握り。錦の産屋にニ登し給ひしを
今かゝる辺御松山の麓の下に埋もれさせ給ひぬる事よと
感涙に袂を絞りながら一首を奉りぬ。
よもや(君)。むかし玉の珠とても。かゝらん後世
何にかほせん。
と吟し拜せしかば。御廟のうせりか。

濱千鳥。あと住都に通へども。自身は松山に。三日をの
みそ啼く。

されば西行の四國に渡りし事は治定なり。五代所被の
國總島に名もなき神社の荒れたるあり。いく秋をふれ昔幽
興すべきは子もなく。あまも一つの春か朽倒れて。花咲
櫻もまばらなさに。ある年の野分狂しくは宮の松皮加
棟本を吹飛し。隣家の某が屋敷に塵塚をなせしを。
下部共木葉と共に掃集めて洗足湯の焚物となしけ
るに。此湯を遣ふ馬屋の者狂乱し。俄に口走り出て物を
誑りかゝるも鎮西八郎為朝なり。日頃の無礼は見許し

ぬ。むわだ神木を焚て。土足を洗九二小事むげはういつの奴原一
家の人糧残らず断命すべしと。樹木を橙き竹を橙ぐ力
量山まにも為朝の神靈たふべしと恐れ謹み。誠は武ま
たもの崇敬すべき靈神たると。倭に禍を修西復し神垣
を出ましかば。狂気の者も静まり感徳ありがたきうけな
らず。武運の力を操ふべしを神託の先を告りしに。その
のち標州仙場の夜軍。えたか城の勲功天下に隠れなき武
勇の名を揚り。子孫長く栄え行事神徳の應廿護によ
る申すなすべし。伊勢の御も家を去りし後廿は四圍に移
りけるとも見え。清女納言が西室も淡州屋の尼にありと

もこれのみにあらず。世に思ひかけぬ所に昔の人の遺跡は
残るためしあなからず。紀伊の國。細知らずといふ港に神
社あり。えより疫怪の神とはいへどもいつれのくわんどや
うにやと詮議すれども。昔より知れざるに極まりしか。あ
る年厄病流行けるに。御湯を捧げてすゞしめ申せし
かば。巫女に葉うつり給ふと見えて。始めて神託に我は
右大将頼朝の昵近。藤九郎盛長が靈なる。仔細は軍託
に歎れし如く。うつは舟に乗られしか。以所に流れよつて。鬼
人の為めに神に敬まはれ。疫の悩を守るべしと。神はあ
からせ給ひぬ。これより以家の男女安みを通じ。藤九郎

の宮と申す。一とせ瀬戸の温泉に入るときは辺りにやとる流すわ
けるに。靈験あつたたる事隠れ御座らぬ。比國に一さい志
よの氏神と云ふて松柏かうがうしく女系りたる木林の中に
少なき祠五つ六つ並びおはします。され共神の名も知らず。神
躰拜みたるものもなく。歳年経水とも修西復の昔もせざり
しかある年の八月例の大風吹て。祠比向ころびて回の中道
の街にナノとはせしと。比子共あつめ。はじめの所に居坐
しぬるついでに。御神躰をも拜み申せとて。おのく板をは
づして差覗きければ。一社は干鯉又はよこづち。あるい
は杓子櫛木塗桶縁の離れしいかさ。鍋の廿盞。破たる火

桶を。ひとつ宛こめをきたう。各々不慮議をなしけるに始め
より一社離れ水も森の奥深く鎮座ありしと崩き拜みけ
れば。形は大きな橋木に似て長き事ハす。比白水平
の角細工にして五六丈。小高き所は糸をこらび出ぬるを。こ
れは何といふ物やうんと百姓共不慮をなしければ。小才
覚なる年々舟役の老。中には進み出て。さては比神は
孝謙天皇の宮と拜み奉れば。今より比林も天皇の御林と
申せばやといひけるを。庄屋頭と振うて。天白まじりにて
は和家の許状なくして成がたきよし。吉田殿の父はめも
むづかし。横鎚比神を鍋蓋比神を。唯耳にまじる

御用の品とあめ奉りぬ。

九六

第三 袴三層衣の始まり

南京朝魏はおしたより若者に及べども。若者まがら付水金
これ珍らしとして持遊はれしを。名にも似すと憎まれ
今は知人も稀なり。月は惜を水て入り。櫻は散を空をた
しとよみ残されもた。伊勢の國白子の不断櫻は四年
また感嘆の色を見せし。これ歡音の空木なれば。
枯たる木にも咲くものを況や生木に時を分ぬ如智の方
世に相常位の金文はや。ありがたくも覺甲れ。昔し
この國の傳下に大谷を在衛門とし小身の者。六十一歳

して病死はる節。一子古平太に遺言せしは武藝文の
の外に好きたることは何事によらずして。好ぬ事を勤む
べし。必ずすべれが好き好む事より。夫そくする事あり
と。一言千金の申いかいも古平太、死なむ心れず。好色
博奕。遊山。美食。大酒。作病。朝寝。の怠りを謹しむ。
ら馬。江文の道に倦ず。道を守りて奉公を勤めれば
一家中の子供には古平太を以て習へと公席の子午にいはる
とは。是れ祝の教訓を守らばなり。ちかるとは古平太、夏
冬なして胸掛を離さず。ある所にて若侍共夜話しの
次年に、古國の名物同に立もの二つ。ひとつは歡音の

九七

不断樓次に古平太が四年の胸掛と輕口をいひだして
九八
軍陽軍鑑の抄にありし次手。信玄の時代まで挾箱と
いふものなく。社祓衣類は竹に挿して持せられ候。挾箱と
申し候こと。竹筒に仕替りて挾箱と名はれ奉り候。さて又今
袴、肩衣は。松永彈正布衣の袖を、疊よせて用衣と
し。長袴の裾を切りて。羊袴とし。り、しき、武士の礼
服とはなれり。それより陣羽織。肌衣の制方物袴を
雜談に移り。侍の不断胸掛といふ物はなまぬらう。當
國二つの名物のよし。太らまの耳にさしけるより。折節

相読めたる十に平太とこれし生され御前にと被而誅せり
御戲れの折。得親に。嫁の侍人一興の笑ひせり。御意
なまに肌を扱れりと勧め候に。是非なく押肌扱がし
をよく見れば。黒き胸掛に白き絹に切付けしは。小
身の古右衛門將に平太。只今馬の乗り廻りへ持程
に御取立の御厚恩。兼に肥古右衛門没後。申渡
せし條々と書付たり。既を離さず身を謹み。御尋
公一日も倦む心なく勤くと。勵みたる上貞信の程歎れ
けり。同公の名を侍人までも。以忠心の志しと感し
座中慰む外の鳴を静めける。大守殊の外の機嫌に
九九

て、奇特なる心慮見届けたる上は申渡すなす。其方はえ
来某が處。特監が外妾の懐胎せしと。此は在正川奉
公町降たる勤め方たるを以て。伊くく所なこ水あり
妾共白指輝して古在正門につかほせしなす。以承津の者
共未だ去る事なし。若かしたから祿を此増せしは。全
く目録負の法にあらす。此子が勤め方にもりて、取たる
しは胸出の書仕はて。諸特恥辱倍し。美惡共た天
の罰事雨のことし。此の見る事一電火りの如しとし。
此平太が行跡陰徳陽報の理あきらかなる。以上は愈
々其が鑑定を遠えが縁ありある身なれば。殊更謹し

其勤むべきとの儀。此平太亦なく泣涙して月に出し
りり。人はたゞ己れと謹しむべきにこそ。

第四御殿心勤心なる幽霊

二條の何某越中受領の時。家中に代物屋敷とし任人
く。三人お録き、掃死したりけるを、勝浦彦五郎は屋
敷を治して住けり。即ちも世の取汝法にたかはずと、夜
前裁の通りを。徘徊するものを見れば、袴をこ着した
る軍方の怪けたる形にして。その女人に似る、躰にもあらず
袴幽霊といふこそさる事なれ。何者ぞといへば行衛
なく見失ふと度なる。ある夜春雨降録き淋しき、

一〇二
に臍の気色見んと。兩戸を開て梅の移るを怪しむ。此
例の男が紫山に佇みぬ。彦五郎のつくことばをかけ、た
んがが事かねて聞及びたり。以屋敷に任の致さる上
は、家来同前に思へば少しも遠慮なし。今宵宵徒
然たれば内へきたりて伽住れといはれし。以者畏こま
候とて。会釈なく座敷に入来る。田力ぶり爽たるが。
今宵は三寸ばかり。尾もみへず毛も生ぬ常躰の人間に
憂の事なし。初対面ながら按摩を無心申といへば
後に廻り子軽く運ぶ所知らず林に脱りて意味よし
さるにても世は正林何者ぞ。あつらうに語りて向後は

毎夜心安く出入ノ事思なく仕水といへば。幽霊を差へ
て。目取申お屋敷に四張りあるも今宵宵ばかりなり。そ
もく私儀は。以屋敷三代先の禍見跡藤太家来可
右三門と申す者なりしが。一人傍帯中の内の娘。其女
形と聞て。妻に申かけしに。先様不同心なる事とて
知心サ。聞討にせられし。拙者ならで知る者なかり
しか。下郎のこんしやう心えなく存せられしにや。
故なく申討にあつて相果てぬ段々非道なるうへ。さ
うとは五人とは存じかたく。怨みの一念残つて跡藤太
を取殺し其子をも殺し。其子今江州にあり。今宵宵矢

橋の堰りにて。丸太舟を棄沈め。棄多七人助かり。三人は
水に溺れ死する内一人跡々藤太が孫なり。今、は離業の根こ
断て怨むべきものなし。されは迷魂は火の如く煙灰力は油
のごとし。油つきて火の消るか如し。今、は妾執晴て怨む
べきかたなし。念なげれば形生せず。かつ冥計にあへる時
袴を着したればかくのごとき次女を離れずと詠りけるを
度立一即崩寝入しか。お難申を返り見れば。四十指へ
矢にける。そのあけの夜より函び幽霊来らざる。度立一即
不思議に思いて江州の役りに崩は。月日も変らざる
ま橋の堰りにて三人溺れ死せり。跡々藤太が孫ま

で取返しけん。善悪因果は。ながく子孫に傳へて
業を果す事昔より夥多見えたる。一念五百生ある
恐れろし。

第五ノ千合セの仙薬

仙人の事は列仙傳といふ書に集めたる。日本の仙人は元
言う釈書に見へたるを抜せり。扶桑列仙傳と名づけて極
行に進き世に出たる。役の行者久米の仙人宇治山の七地撰
なども載たり。俗に語り傳ふ常陸坊の伝説も。仙術を得
て三千年以前筑波山に居たるに逢ひたる者ありといへども
々の竺經や鈴木や新屋が事も年久しき事なれば。其

時代の事共此由忘れたといひけるよし。忘られたはと真言宗の常
 陸坊やらの。翻坊やらの。名残の友といふ事るに
 書残せし。堺の藤井元徳。仙人になる昔の方を合せに
 して。羊と羊ばかり飲でも早飛花行白をの身にたりたるかと
 屋根へ上り飛んで見たれば。ころび落して腰骨を傷み。久
 しく悩みける。は元徳は俳諧師。多鑑にも託せしや
 うに。表徳多を社向ホ斎と申ぬれば。及ばぬ事とする
 もつて夫やうくさひ事と世説に云ひはせり。秦の始皇徐
 福といふものに不死の薬を求めて来れり。徐福の宮る山
 に渡せしよし。唐土にも仙薬はないものと思へたり。楊貴

妃も仙下り入といふ説に就いて尾張の執印のや道業に
 申傳へたる。かの徐福も絶妙か詩を見て北は九州の熊野山
 に来りて西たひ大唐へは帰らぬと見えたり。物心して仙術には
 天仙地仙の別ちあつて生長を保つ事。膨祖かやく地を
 よせて見る事。西長坊か如し天を飛北ありま土を渡り。
 聖西粟に志申させんを入れ。大海を母にたへ。汝鉢に
 水を入れて。すゝきを釣。只今うまけた種が又生えて。東寺
 曇良瓜を嘗美せしむ。灰吹の筒から見て飛る中に牡丹
 も咲せ。玉の如く可味なるなく。松田が機刺。極座か多
 此の。よつてつくものでなし。唐には老子なども仙人の類に
 一〇七

故快せられたれ共今分のちかひし事なり。儒教の熾んたる時
 は流行らぬ事なりしか。銭金の末葉の代漢の代に面
 白かりて取離せし道あり。たかかれ共程子などの説には
 人は地にまうて出生するものたれば。多る類の様に道と
 離り雲に葉と離り理はたき事なり。若し山中に山石
 妙色を離れ美食を食はず。世路に氣を憂やます
 松の葉などの色を食ひ。かけありかば寿命は生延
 り。竹葉たると二程全まるに見へたり。かやうの事
 を信じて、山中に入て餓死するものあれば。空言仙羽化し
 てその行跡をたえずなど、影たゞしくまるつけ御入しが

思ふなるものは向大床しくなる事になれり。新教の亦通
 は又此境にはあらず。蓬萊。方丈。瀛州の三島は。高
 士あつたは聖と並ぶ説もあり。飄々字から葉掛馬を
 引出し。徳利の中は傾珠断を建て。不空の中に屋形舟
 を浮べて歌兼伎子供の悦ならぬ踊りを見知り。高向
 由自互の通を得る事は金銀さへあれば。あつない雲
 に葉いでり。加馬を説き飛行する事ぞかし。山の奥の
 藤猿見たる眼から。物洗ふ女のはぎの黒きに通を
 失ふは。に惜き哉なり。人は只金通を得べき事第一
 なり。いつの頃にか中江おに他人といふもの葉さきたると

いふ事あり。仙居となく四十余の傍にあらざら山伏にも
 あり。此里に知る人あるにはあるされども三日五日はか
 りには月と女に経通りぬれば。自づから見えたる様
 にて高家の店に腰掛。折々息をひ物語りするほど
 の事。四立るを以て此の事昨日の噂するが如くさうに
 五粒の類を喰はず。たかもは膚健やかなる色艶にて
 古き世の物語り相憶せざる甲斐に。としの程さといは
 樺の園くに春をわろ。木の葉も落るに冬を知らば。雪
 の境もたかならず。特ながうその教を覚えし。以中江
 村の未だ家后なくまはゆかかえはくたどの教宗あり。

今は脊戸川の幅立す川はかうに流る。川上の流津浪
 高く。この家の辺りには坊風や刺のみ春の来るしを見
 たり。林又後志の大江崎に住しが。え知る地な水は
 又屋に住り見れば脊戸川し夏世帯ほどに細く。つもれ
 流は名のサ流氷。辰は家かやうに立鏡をぬると流るも
 さ本判す。此は。此里のは神の社。船出す大に中は返す
 中の勸定とある。八日午に野原知た。人なれば
 千子の拜命を傳う仙人と傳へき。大川夏思いとたすと
 いふ事なし。それよりたまくと来ると待かけ。彼方此方に
 請し入る。昔と咄と聞に。源平の戦か頼朝。此経の事

昨日の見たる様に。法光上人にお十念を授かりし事。土佐坊
 が二條堀川の御所にて震むく起誓文を書きし事。敦
 盛の若衆成回リ造谷入道が角の入りたる款に。大忍問
 答の時懐中へ錠をさして。宗諱に貞鏡は。諸宗の
 儒を木と割るやうに坊主頭を切はらはんとな味たる吐
 し。細かに説くは。五合の三斗以前の事ナリに執た
 やりに面白かる。さして何とて今までは身命を保ち給
 ふをしいは。茶を飲んだといふ。少しばかり喰て見たい心
 誰もある時所詮もたうければ。は茶味の肉三色目茶に
 渡す。調合すれば。唐の泥刀の博へ買に行水はなら

ず。往復三日程にはすれども路銭はいらぬ。茶種代金
 拾四五兩入なり。一劑を七日のうち三人程にし用申れば
 只今相果る定茶の命も十五斗づ、は確かに生運
 といふ。リかんふかさ商人兼船主を出して割附て見水
 ば。六十目小判に九百目。壹人前拾五斗づ、生運
 水は四十五斗。三人の身命壹斗に二十目。一日にわ
 て見水は大事の命五石五斗にある。廿数段高者の茶代
 もこれに合せては高きものなり。と他人も随分合心候
 る友をかたうひさりとては千金にも替がたき。は命を
 銭の相場拾三匁の兼用にして三匁あまう。一日の身

命を買事はありがたき例なり。家昔未久し其力出せば有
 候しほどの事にて長生不死の頼しき。六兵正にも知らせず
 は、宣ねて深淵へての恨みもいやなる。九兵邪も念返の
 中と告知せし水は。七組にたつ。高命金子百五兩。一編を
 にかの仙人に頼みし水は。既らの既六つにひきやうすべし
 その節屋根の上より一声の暇をいたすはつとつて。一雲に
 葉り海を見送ると。空下なかねて待どもきたなし。
 さてはに候過して約束忘れられしはやと。三日の過るこ
 まりども帰らず。十日廿日廿日半と一と一と過ても今に行
 方なし。これも受にくい金子をたゞ取たる謀計者とは

思へども。これまでの身持心づくし。いかばかりのニヤヤした
 らん。兎角人は苦しませぬは樂しまず家職を公んたつ
 す難行すれば樂を江う。向木をすむは苦とするこ
 ほうなれば。くちをよくめいくの勤め方を勤めし。悪れ
 を取らずして瘧せいたさるべくか。

第六 壹岐の國 呼子の傳受馬

昔し壹岐の國。風本平馬といへる三兵衛。代々家信のて
 彩たき女ある中に胡蝶化といふ二人別して此後化
 く。同じ月次に懐胎して平産も月を同じうせしか。
 胡蝶が産る男は一日二日経て死せり。化が産る男は

ぼくもかもし健かに。此家の世継と一家門系目公度一取
 離しぬるに侍は。花は早女妻同前の物かほいに侍
 づかお身ると。胡蝶は子に介れと悲しむ。又は花か
 ばゆくも差次やみ。世のあじきなき述懐の始ににて。
 執かり心をまじむ血は氣に連て胸をわぎ目迷切りに
 つちに立屋坊はて空しく成ぬ。平馬も不憚なを是
 非なき世の習ひ。咲子の松原まにせ榮り。稀に問夜
 半も淋しき松風を絶おや若の下のに墮らん惜や十
 九歳の苗々は胡蝶の名の残るに侍。いつの隙よりかはす
 の敷陰より立屋女とももの夜女に声しなきわたり。

平馬の屋敷に通ふ。これ胡蝶が亡霊と因取取り物状
 水なく。かつ世の噂かりも少なからず平馬の心氣を悩ま
 してける。兎角昔よりかやうの事は経院羅尼を子向
 して。認るにさせんするにやまずといふ事なしと。様々の
 口印らむをなしてけれども。猶立屋女の言は止まりかたし。
 お花一思女ホして胡蝶が苗差所へ来り。御身子を失い、無
 残り多しからん。鬼いやにいとおしけれ。咲子を参らせん
 とて世継と侍づく子を更らなく塚の前に捨て知り。念心
 伸る遍ばかり喝へて立屋の御身は早は世を経たてた
 る事なれば咲子の介抱成がたし自かた其方に秘けり

守りて巨匠く後世をとりつらばせん。あかる上はは子の身の上を息災に守りてとへと。抱きとりて歸りしか。その夜より立生女の声もやめ。怪しき、女も見えざりける。此處に一念の望を晴させぬれば。念佛供養にも勝りける。はや。さかば佛も強かに勝おといふ金言思ひ合されける。玄中託にはるは立生婦一死してたれり。人の子とてうて已れか子となせり。小児の衣類を衣外に乾べからず。はるまやうて血をつけぬれば。その児驚風てくかんのやま心を生ずと見えたり。又姑獲鳥とも夜行遊女とも名づく。又本當にははるに雄たし。七八月の頃。夜出て人の子を害すとあらへりまことに立生婦一死して子を思ふ割に迷ふ一念。おると化して彷徨なるべし。かの極樂に往生して蓮台に坐するも。は五陽の形のたいちに坐するにはあらず。至誠心の一念の信心より清浄の身想を回歎はすと崩えたり。もとよりは世の形は。土か灰になれば悪念の相は地獄に至つて形を現し苦患を受ける物なるべし。あかれば善悪ともに一心一念の作り出せる形なればたゞ念々をたしなむべき事なり。

一夜船卷之三

一夜船巻え四

第一世は様々の國狂歌

なき魂の来る夜とく梅月晦日に生霊起る里あり。菊の
節句に雛祭る國あり。能聖の一律なき二升啼とてサ条礼
に雇水取て啼債を取る浦あり。夫他國の留まに他人の
子糧を取て立度で。子柄にする里あり。女嫁かて夫を云月ふ
國あり。むかししよる池西海あり縁但せず。一村中他人と云
ふ者なき在處あり。たふむをえらぬ里あり。ふんごしかの
集あり。刀とさせは鎧持をも殿様といふ。衣を被ば草
堀とも長老様といふ里あり。渡り比べて世に憂ふぬは。喰ひ

て寝て起て。かしよくに忙かしき月日。又大晦日は定めな
き世の定めとて。知たる闇に敬馬ろきけるは。是許の所は。時
油断する申えぞかし。されば陸奥の南部といふ所は。曆
の大小にかまはず。十二月は三十日を一年の限りに定めし。諸
國は亦九日を小の月の大晦日として元三を用申るに。は
所の懐世は二日と元日と祝ふ。これを南部の私大とい
ふ。昔しは國のかたはうに室積大花と申す大花の子
龜千代とて。七歳の若殿は神の宮社糸ありし。頃は卯
月の末。森の本たち粉たう中に。拾ひ五丈の榊若葉
秋の紅葉の如く色づきしを多折て持運びんと仰せ畏

こまうと木に登りてて求めさすれど。七八間^{一三三}は梢に登りな
から。申く杉の若葉ホまで子の届く事にあぐす。竹竿を
以挟みサ落さんと計りども。敏系りあいた。枝にたやすく
折るとかたぐ。末づたう猿の腕にも及ぶまじと。手まは
りの中間百姓もあぐみはたさ折ふし。物頭中原金
太夫かたに匿まいし浪人。水田民右衛門何心なく通
り合せ。様子を崩き。多折り弄んと申すに。入柄かた
見なびた。霧。取敵若殿御様嫌取繕ふい申す為友
ればと。早速かの若葉の色づきたると指面申され候
木に登るまでもなく。もろろに履股取つ着ひ。狙はす

ましてかの枝を壹尺四五寸莖をつけて射落し。鞘で若
殿に取次を頼みければ。様嫌よく下向あける。浪
人お家も望み一両と手先より金太夫取次を持て。奉
公の願ひありし節。何はしても藝能ありやのヨサ水に。無
サ藝のよし申上しかば。身上相濟手か、りなく打過しに
是程矢坪の細かなる弓の手練。頼女しき取汰。大
殿の耳に達しければ。當家新座古座に限らす。一藝
に名あるもの。その甲乙に依て祿賜はらすといふとなし。
先年無藝のよし申上たるは如何との儀なり。銃を使
ひ打物軍術に巧を得る事は。めくくきわまつて。ちり

でかなはぬ儀なれば申に及ばず。武藝の外に拔群の技
 能なくば。一藝ありとは申上難しと云へしかば。又は春
 風耳に達しく知行に相濟けるとかや。且真とに静謐の御
 世なればとて。武士は弓の替りに三昧錦を引き。僧は伽陀詠
 詠のかほりに投節を唄ひ。斯人は秤りのかほりにはたもと
 りうの長服差も横たふ百姓は圍碁の賽目と論じ。お
 のれくが鏡余のかしよくも賤しく思ひ。身は織士に溺れ
 たがらう。工夫の快楽を呈次や身身に履せざる華衣者とい
 みじき事に耽りぬるよう虚偽不実の快らひ出来ぬ。華
 美余勢の大痴とならう。人參代をよこには慢て。うきか

ためは長き夢も醒す。是れ本とすべき處を末にし末にすべき
 道を本とせり過矢なすべし。今の辰右衛門は本を守る道を
 守らうとせしものや。武夫に限らず。士農工商の良心得
 になまびき事なる。

第二 八回 八品の治世小路

むかし中國長岡の城の祿半島飼吉郎在江戸。さむと云ふ
 娘一人のみにて名跡つぐべき男子なかりしかば。隣國より養
 子して半三郎とて。子跡も養父に劣らず。利奈美夫の
 の響えあり。おさむも年十七歳。近き程には婚礼取り結
 ぶすべしと用意せし内に。さかりださたる娘。いとなく

此方より去りて。律気なる半三郎も岩木なる物は親の
 許すぬ内所祝言。去年の文月七日より一向向うなりける。
 立振毎味両親の目にあまうて。刃心ふ事は余所にならぬを
 きうとは待兼し不行跡者共と。云も云ぬ顔色に氣味思
 く。あまつさへ片々の女の役も。指を折て見れば。四月といふ
 尤もも行末は夫婦に極まりし養子計算とは覚悟の前な
 かる。云もぬ親の内意を早合はたなすかた。猶又如何
 なる所存あるも志らぬ志郎在る川か心底を。踏附たる
 に似たり。況や空き身となるを。小氣にて迷惑を千方に思
 ひ詰め。取廻はせし文を常々くわんせこころにして。

是れを太く組合せ。刃心階子に捲らへ。内々いひ合せたる宿
 嵐。高塚へ打懸心。お澤を連て棄越へ。長田の城下を欠
 落して。上方へ登り。大坂の細世帯の小路といふ處に。假の
 宿。身をまき甲斐に。無事断の宿老に可哀ながら。半
 習い子供指南の看板を懸て。寿公人の受状書信
 式人。痴話文書代五分。同屋より田舎下の作らば状
 相場書信に鍋尻を暖ためおさわも女干業の細き
 糸すじに玉の緒を長らへ。直まが中にも二人。樂しみの
 種となつて。高岸糸色づく秋の夕べ。嵐し身にし。所
 せく小窓より月さし入り。何となく物哀れなる折を。故

郷の空懐しく思ひ出で。寢覺々の晝夕物語るに。流石
 石因念愛の親のおもはく。心の闇の覺凍なく御在らん
 今頃は先非を悔るに甲斐なしと。若氣の甲斐業に不孝
 の身となる事と互に懺悔しつゝの折ふし。白藤滝右衛門
 とて。長岡の浪人。今は江州の城下に身上ありつき。は
 度京都へ用事に登る。これも中國蘇生なれば。こ
 とはう申立と。親里へ次手なから見え舞に下れば。大
 坂より土産物と調へに。以度彼度往來するに。島
 飼流の子供指南の看板目に學ぶ。古しへ不孝咄
 せし半三郎が行末如何にと不面思ひ出で。見り程。

筆法。見知りたる様なれば。麻忽ながら安内しく。物も
 う。誰れといふ顔互ひに久しく敬馬ろき入りたる對面。余
 こそ物種。嬉しく悲しき涙取難たる物語り。何から
 申べし。先は何れもの御無事を見るにうけ。吉郎右衛門
 殿御事は御兩人忍び出られし。高塚の繩階子よ。
 直に盜賊押入り。家中の財寶を奪ひ取のみならず。
 大物防ぎがたきには。吉郎右衛門殿御夫婦共に切
 殺しぬ。兩人の欠せ落と取難たる詮議。遂に盜人の行
 衛も知ず。永く家苗断絶の端すましくなりしに。二度對
 面致すにつけては。命こそ大切なれ獨江ゆり。重なる文

通換拶して別れぬ。半三郎おさわ。兎角の言流たへて。
 杖々が不行儀より親を盜賊の子にかけ。家を潰しかく
 淺猿しき流浪の身とならし。謀まるといひ恩をかへり恩が
 る罪。故を今日まで知らせる不孝といひ。玄白類にも劣り
 たる境涯。生る甲斐なく。サ洛涙のだんにはあらず。以上は
 三ヶ年以前の見知ぬ故き。何を同者の昔もなし。たゞ神佛
 に祈りを懸。精進潔斎。く毎日始離あらゆるしやうとう
 雷地を叩き遠りて。祈誓したりける。別して今日ほかの國
 えも立退し物の今年日忘れかた。佛前雷供の調菜
 在すが如く。常に好物のあへ物と供へんと。胡麻を包みし

反古を見れば。祝吉郎在門が筆蹟に紛ふ所なしと。
 押戴き反古は賣買ものなれば。何方へ散行くまじき物
 にあらぬども。先は八百屋へ便りて何心なく訓漆をかけた
 ある時弟子衆も頼まれしが。盛光が影扇木の肌差
 を賣人はなきかと。吉郎在門差料の物を能と実身議
 の糧に頼みければ。八百屋なるほど物ら出入の浪人血衆。
 打物あまた拵はる水はの等ぬへしと。早速翌日未
 お治の銘の物は先達て賣拵はれしよし。以服差は天
 正祐定ながら。月の輪とかにて好き嫌いあれば。下直
 に拂ふべきよし。次年には小袖も賣物。翌日まで御返事

女とて一夜寝る。さて服差を見れば昔郎右門の
 祐定。月の輪は氣の妻なから昔月良きとて秘藏の格へ
 も。女は目坂の連牛。ふちかしの秋の野の毛彫。せつ
 ばはむきの陸奥鎧まで遠くは。その上小袖の紋所
 菱。深物やへつかはす時絹のちりしのはしかき。お
 澤か
 手お仕しに大がはす。以浪人こそ盗賊。親の敵と夫
 婦を比べ。地頭へそのまゝ新へ。國元の首尾昔郎右門か
 筆蹟の包み紙祐定の服差。小袖の紋あるもの書は毒
 細に申上げ水袋。かの八百屋詮論あるは。諸國をまはる
 夜次宿の頭とまで。以八百屋の裏に坐敷に高屋住見とて

て忍ばせ置き。盗み物賣拂いの口銭を取る事まで拷問あ
 るうへ白状仕る。残らず刑に行なはれける。半三郎一度は思
 ちちけるか。養父の敵きを尋ね出し。新訟申して手
 にかり。我の道は違したるゆゑおさむを連れて帰参せし
 めたり。

第三念佛寺の和尙と水舟迷惑

曾祖父は信州桔梗が原に於て甲首を取。夫より相
 續して武門たぢろかす。代々嘘つかず盗みせず。出頭方
 に輕薄せず冬も頭巾被らす。足袋はかすと。穀面つ
 くりとつと勤め願する士は。大方時に過すして家と

失ひ先祖へ不孝する類ひの人ありとや。命を軽くして義
 を守る武士さへ軟らぎ来る世の静謐なれば。まして
 工商農人は素より分別あるべき事なる。政尚者は人の命
 と請合ひ出家は引道すして極示へ業内致すとばかりを
 渡世の白罪にはあてがたし。借銀の口入水督礼の執持。
 養子の肝煎。手かけ者の中宿金山の銀元。賣家の賦
 金。かきに壁にかかりて兎角握る手練を工夫致すを智
 恵心者とは名づけたる。昔し和泉の園濶井家の侍。庄
 田助八万へ同所念佛寺村和尙珍らしき御見廻り。別
 の儀にあらず。御傍輩武林堂三郎妻女に御白合の

妹君を肝煎申度存るなり。竹助同役柄互に御存知の
 上申に及ばず。拙僧探訪の儀何れも如才なき因縁
 につき。御内意承はしに集りたりと。志みくとの挨拶
 助八思し言よられ忝なく。申も他所へ遣はす女の儀
 なれば。なかま同前の重三郎儀と申し。御執持と申
 し。ともかくもとれうじやうしけるに。和尙満足は
 重三郎方へも内所語り合せ。さて坊主の取持ち世の
 聞え如何なればと。重三郎縁類芦岡平内沢田九
 郎右五門に世話をやかせ。組頭老中。大らすの耳にき
 し。ないげ首尾よく相調へ。早速婚相済けり。と

の、ち助八重三郎同道にて念佛寺の和尚へ。一礼に余りめると。長老心得がたき挨拶。苗で拙僧存せず。御花びも申入ざるとの事なり。兩人目と目を見合せて不審晴れず。大方に云えうけず帰る道すがら。扱々合突の申かぬ事哉と。色々註をつけても濟ぬ分はして。おかしく審かしく別れける。その夜助八が閨間に案内もなく念佛寺の長老来うれしに。驚ろきたる躰を見て御不審の段御尤もなり。今は突を明し申さく馬心僧儀は正躰野狐の身なり。先年城守之麻狩の時。既に余を失はんとせしに。上重三郎殿に助けられ

し。その恩忘れがたく。影身に添て守る所に。貴公の妹を見ぬ戀心に心を傷ましめられしを。いたはしく存ずれ共。申入べき便がなき申えに念佛寺の住持に姿を變じ左右方の御内意を取持しに。早速御承引の段。天候しけなく存じ奉る上は。愈々兩家の御武運を強く守るべしと。云終りて消すが如く矢ぬ。其後当國の境。山にの原寺盜賊取替りし討手と助八重三郎兩人に仰付られかの寺へ馳向ふ所に。又重衣門も助八重三郎同じ出立にて取圍み。前後を圍まれ。盜賊叶はずとや思ひけん残らず自害して死ける。これを未だ表門に

一三八
は知らずして塚を穿く。垣を破りて能水入ども。防く若
なく此自同じ枕に自害しけり。首を刳て鳥木にかけ
たりける。以事の武印によりて西人後々加増昇進の身
となりける事隠れなし。されば狐は人をたぶらかすほ
どの智慧なれば。怨をもなし恩をも報ふ我をも知
ると見えたり。人として恩を知らぬは野狐にも劣るべき
なり。況や禪にさんじて生死を出離せし狐も女はば
人愧かしからずや。

第四 梅田香之助桑心の事

周防の國須磨の庄の深山三里計り奥に。日比生といひ
里あり。人家數十軒。朝夕の烟をしからす。四方に道絶
えて隙村もなく。世に隠れ里といふはかわらの所をや。

天文二十甲に狩人迷ひ行き。それより志かみさをつけて
椎密たまくの通い路になれり。爰に任人の形猿の如く
言ひ来も通いしかたき。男女も見分がたきほどなりしに。今
は中幅のちやじ申位なだかに。鬚友の甲を剃て元結を針
にてためつけ。白縮緬の肌着に善一州が鳥羽もどきの墨
絵万いたく物好。都配かき。風俗にはなれぬ。以里の山
の頂に宮柱ふとしく。彩色鮮かに。昨日今日の造位は
の如し。いづれの世。如何なる人の建たと云ふ事も知らず

世中は麻鬼所と云傳へて。年訪の輩中もなし。たまたま知月
 道兼備の沙門など拜みとめて。不思議とならまてな
 り。その巖窟人間の業とは見えがたし。此所に程遠
 か。ぬ小方山の林床淨立寺の住持の中かゝる身とて。梅田
 幸三助元来都方高家の給人の末子。一人は出家とな
 して。九族生天の善縁を結ぶ便なすべし。此寺も東也に
 續く山を庭に受て。自分の景色。境ははんほくのし申
 くうよう漲き。飛鳥自づから歸る。白雪足下此起
 り簞兒のおとづれ微かたて。空に吹送る嵐し。残る暑さを
 凌ぐ夕べ。立石に植ゑるササ鉄の影も。怪しき美女

忽然と雲がみ出ぬ。此辺目馴ぬかいどう姿た都の空思ひ出
 るばかりに。幸三助不思議晴す見答めけるも此女近く
 より来つて。かねて意心慕の略まし。今宵は上人も留守
 を窺かひ刃心ひ余りぬと。ちめやかなるさゝめいと。えならぬ
 匂いも移るばかりなるに。幸三助現なく雪の夜雨の嵐も
 急たらず通いなれしと。住持傳へ聞き。狐狸のたぶらかす
 にはと幸三助と評件耻しめ。獸に心底を討る、程の所
 存深穢しき儀なり。何條一太刀にはさし殺さざるぞ。佛法
 の上にも降魔の利劍あり。一刀両断の器量ならでば。し
 甲つりのしやうげに妨たけらる。況や今日の玄回類になぶら

る、は武意の軟きなりといたわられしかば。幸之助も高き覺
 たる心地にて。その夜の刻限を相待所に例の如くくんじ渡り
 て枕紙に佇むも。抜討に手答へして。ちとめたると思へば
 女は行衛なく影失せにけり。松葉してちたいゆくに血を引
 て野原に出たる躰なり。これを知り返に跡を追行ば。道
 平らかなる玉鉾三所ばかり過て去くたよ宮だち物ぶり
 玉樓金殿たちつゞき。宮門玉垣倒ならず。異香紛々と
 して。樓下の追風床しげに。猶奥深く笠簾懸たてし。
 寂寥た。階の上には。血を西復しつゞけたよを知り返にさし
 入る見水は高き坐に綾綿のちとね厚くかの女只一人。朱

に赤て打伏悩める気色見るに。興覚怖ろしげに。身の毛
 だちけるか。独一人見ては人審かしく。語り傳え人もは高き
 としからず。後日の證人を連来らくと立歸るに。まもなく
 幸に歸り上人に彼様の様躰を認むばさらば同道して見分
 せばやと云申に夜も明渡りけるに猶心よくかの所へ先
 立てもとめ行に。あなたになたと山路に彷徨。血の跡方も
 なく。朝夕見り峰の山嵐し。樹木のおひ敏系りて道つける
 方もなし。里人にとへとも更にさやうなる大川西原なるは
 殿に似たる所。隣園にもなきにきはまらぬ。さては仙境
 の別世田舎はや世俗にさたある隠れ里はや。唐土には

かゝるためし多く書籍に見え侍れど本朝には稀なる
事はや。珍らしく賞申の人多し。

一四四

一夜船卷之四終

大正五年拾貳月貳拾壹日印刷
大正五年拾貳月貳拾四日發行
非賣品

不許	復寫
----	----

編輯兼 發行者 騰寫版刊行會
東京府下瀧野川町字田端四百二十番地
右代表者 馬場 駿
印刷者 馬場 駿
東京府下瀧野川町字田端四百二十番地
印刷所 騰寫版刊行會
騰寫版刊行會

發行所

東京府下田端四二〇
電話 下谷 五六五二

170
204

終

